わが切抜帖より

わが切抜帖より

永井龍男 雑文集

講談社

わが切抜帖より

定価／六五〇円
昭和四三年二月二八日第一刷発行

著者／永井龍男
発行者／野間省一
発行所／株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一
電話　東京（九四二）一一一一（大代表）　振替　東京三九三〇
印刷所／慶昌堂印刷株式会社
製本所／大製株式会社

© 永井龍男　昭和四三年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。　Printed in Japan

目次

頃日片々

器量 11
雪のあとさき 14
正月の寄席 18
勝負事 22
また、年寄りのこと 26
転勤夜話 31
炭百俵 33

古ごよみ
思い出すまま 39
金屏風 42
動物園にて 45
市民の気風 48
ゴルフ三題 49
台風一過 61
酒徒交傳 67

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

応答一束

タバコについて　123
「役得」という課題のもとに　127
ストーブ　134
鎌倉の音　138
扇風機　141
ひもの箱　145
夫婦の作法　148

わが切抜帖より

水　晶　161
銭　湯　167
春めく　172
野球開幕　177
身上相談　182
少　年　187
銀座の着物・巴里のベレ　192
ある随筆の筆者　197
キリンの死　202
月を往復する距離　207
祝儀不祝儀　212
月の表面　217

カンディダの話 223
デンキ屋問答 228
犬と猫 233
耳と鼻と 239
億という数字 244
銀座の水溜り 249
歯医者の庭 254
蓮ひらく 259
「死ぬほど良心に」 264
下足札 269
五右衛門について 275
フォークと箸と 280
ビルとネズミ 285

人の印象

中原中也 293
堀辰雄 296
芥川龍之介 300
古川緑波 303
直木三十五 306
宇野浩二 309
村松梢風 312
小野佐世男 316
菊池寛 319
久生十蘭 323
おもかげ 326
「天草日記」なぞ 329
佐佐木さんのこと 333
しっぺ返し 352
あとがき 357

雑文集

わが切抜帖より

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

頃日片々

器量

「一冊四百円として、三万部の一割というと、十二万円かな」
「そうですね」
「割にポッチリなもんだな」
「でも、ありがたいわ」
つい先晩、そんな話を細君とした。
ある文学全集の中の一巻になっている私の分が、この秋ようやく順番がまわってきたということで、その日出版社の人が打合わせに来た。

そのことが、私たちの夕食後の話題になった訳だが、出版社の人に訊いた処では、現在五万部出ているという話なので、私の分の出る頃は三万位に減っているだろうと予測したのである。

全集に名を連ねるのは、作家として晴がましいものである。

私が最初に選に入ったのは、昭和三十一年の筑摩書房版「現代日本文学全集」だから十年前のことになる。織田作之助、井上友一郎、井上靖の三氏と一しょで一冊、ほぼ四分の一ずつの頁数を分け合った訳だったが、胸に造花をつけて行列に加わったようなわくわくした気分であった。

それから三年して、同じ筑摩書房から「新選現代日本文学全集」が出た時、どういう弾みかはじめて一冊分全部が自分の巻になった。

正直のところ、力士が新番附をひろげるようなもので、四人一組の十年前と、この時のうれしさは云わんかたもなかったが、巻末に添えられた「解説」なぞは、一二行読むと冷汗が出てきて、まぶしさに耐えられず、ひそかに通読したのは半年後のことであった。

同じ昭和三十四年に、講談社版「現代長編小説全集」が出て、今日出海氏と二人で一冊になって以来、全集とは縁がなく、昨年一昨年辺りから企画が発表された各社のものには、二人か三人一組で自分の名の入っているものもあり、新潮社版のように全然オミットされたのもある。

こういう全集というものは、盛名あり人気があって、売れゆきに勢いをつける作家の巻から出版するのは当然のことだから、私の分なぞはいつ出るものか当てにしたことはない。

こんなに矢つぎ早やな各社の出版を、いったい誰が買うものか不思議に思ったりしている処へ、

突然お前の分は九月だということで、その上私一人で一巻を占めるのだと聞いては、ただただ本当かい？　というおぼつかない気分であった。

翌朝の朝食の時、

「ゆうべの十二万円の話、少し違ってやしないかしら」

と、細君が云い出した。

こういう話の切り出し方は、相手に不安を与えるものである。

「なにが違っているんだ」

「四百円の定価で、三万部の一割としたら」

細君は鉛筆と紙片れで、算術をしてみせた。

「簡単な掛け算じゃないか、それがどうしたんだ」

「一桁違うんじゃありません？」

「おい、本当か」

「だって、こうなりますもの」

紙片れと鉛筆を渡されて、私も零を数えてみた。計算では確かにそうなる。信じてよいものかどうか。

「すごいわね。もっとも、税金が」

「云うなよ、いまそのことは」

いまから倹約して行けば、今年は余計な仕事をせずに冬籠りが出来るかも知れぬと、私はさそくに胸算用を立てたが、すぐまた「いまから倹約して行けば」という考え方が気に入らず、

「しかし、なっていないね、君の計算は。なんだい十二万円とは」

と、細君を軽蔑した。

「あなただって、案外ポッチリなもんだって、おっしゃったわ」

人間の器というものは、どうにもならないものだとみえる。つくづくそう考えた。

（昭和四十一年七月・いんでいら）

雪のあとさき

家から散歩に出て、七八分のところに鶴ヶ岡八幡と大塔宮の社がある。扇形に、右へ行けば大塔宮、左へ行けば八幡宮という訳である。

二つの社では、一年中かかさず、朝昼晩に大太鼓を打ち鳴らす。男性的な張りのある響きである。東京から移ってきたばかりの頃、あの太鼓はなんと呼ぶのかと宮司に質問すると、号鼓と教

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c